



## ポーランドが生んだ鬼才「ロマン・ポランスキー」の傑作短編映画 & ジャズ

Sza/Za (シャ/ザ) (パヴェウ・シャムブルスキとパトリック・ザクロツキ) は、1999年以來、ワルシャワの音楽シーンとインディーズ系芸術メディアで活躍する、音楽家、即興演奏家、文化情報発信者だ。映画上映のために、コメダの作品にインスピレーションを受け、オリジナルの音楽サウンドトラックを作った。

### 冒険の価値 + 赤字 = 大満足

実行委員長 佐光 伸一



「無声映画に合わせて即興で音楽をつけるジャズグループ「シャザ」のコンサートを、札幌でもやりませんか」とポーランド広報文化センターから打診されたのが8月。初めは不可能と思ったイベントも、映サと北大ジャズ研、そしてアーティストの宿を提供してくれた知人などの協力で、急きょ実現することとなった。

一番大きなハードルは音響機材だった。会場は映画館であってライブハウスではない。アーティスト側から届いた詳細な機材リストはアンプの種類だけでなくスピーカーのメーカーまで指定しており、専門業者に外注すれば大赤字だろう。私も少しは音楽をやるので自前と借用の機材で会場の音響テストをしたが、結果は「不安」。札幌中のレンタル業者を探したら、普段はロックコンサートを手掛けているスタジオが格安で引き受けてくれた。

当日もう一つの問題が起きた。2人は悪天候の合間に運良く新千歳に着いたが、クラリネットのパヴェウさんは飛行機酔いと時差ぼけでダウン。私の車の中で死んだように寝入ってしまった。それでもリハーサル開始とともに復活したところはさすがプロ。彼らは楽器のほか数十種類の音響機材を持ち込み、スタジオが用意したスピーカーやミキサーと微妙な調整をしていく。彼らの細かなリクエストに応え、オペレーターさんが音作りをする、素人には不可能な、プロの業を見せてもらった瞬間だった。当初予算に外注費はなく最後まで迷ったが、本当に頼んで良かった。

コンサートでは、彼らは上映するそれぞれのポランスキー映画について「この作品は友情と犠牲に関

する物語だ。両方とも人生で手に入れるのは、とっても難しいね」というような簡単な解説を英語で

話してから演奏した。2人から「通訳抜きで」と言われていたのだが、お客さんにはどうだったろうか。

演奏は想像

以上に複雑。映画音楽を入れるだけでなく、すべての効果音を楽器と声で表現するのだ。例えば波の音を声で模倣し、それを特殊な機材で増幅し反復、そこにシーンに合った音楽を被せていく。20世紀初頭の無声映画のアイデアを基にはしているが、彼らは21世紀のアコースティックでハイテクなストリート・ミュージシャンといった形容がぴったりな気がする。彼らの醸し出すアングラな雰囲気と会場のライブ感。私は自分がポーランドにいるような錯覚を覚えるほどだった。シャザの2人も大満足。「とても知性の溢れる観客で、深い部分で理解してくれていることを身体で感じる事が出来た。いい思い出になった」と筆者に語ってくれた。

会場隣のハグマートがロビーでアルコールと軽食を出張販売。上映中の客席も真っ暗にせず出入り自由にした。ジャズライブの雰囲気を楽しんでもらう工夫だ。ワインとジャズとポランスキーはピッタリで、お客さんの盛り上がり方も例会とは違った。「今までの自分の映画という当たり前を180度違う感覚で観られて新しい発見でした。また観たい」というお客様からの声も寄せられた。

入場者数が80名で赤字決算となったのは残念かつ申し訳なかった。ジャズライブは初めてだったが、今後は企画の内容に応じて周知チャンネルを増やしていく努力も必要だ。

昨年のポーランド映画祭では初めて日本語字幕を付けた。今回はジャズ・コンサートとのコラボ。挑戦の1年だった。

(さみつ・しんいち) 事務局長



Sza/Za (シャ/ザ) 12月4日(火)  
札幌プラザ2・5にて

